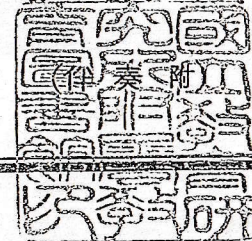


唱歌教科書



ローレイ

Massig langsam

(Silcher 原作)

イモタ マはチ ニにマ ノにつ マはツ コはツ レはマ ルにク シムカ キヒキ ツソヨ ニタシト ヘテミ コヒソ

コカコ ロはモ イをシ 一ニグ 一ニキ ヲの ス テカミ ツツノ ノ はナ 一レシカ カカ 一ラウタ

イダハ ンクニ ノモ ナレモ 一ガレ 一レナク ハハル トツツ ホネク ククをノ 一ヒラシ 一キララ テてベ 一イコト

リコハ ヒもヒ ヤヒビ マノハク アカナン タクキ ヲユラ ルむラ 一

(本曲ハ單音二重唱何レニ使用スルモ可ナリ)

菩提樹

Moderato

(Schubert)

イッソノ ミナモト ノホヤム

トリエグツ ノベラ シゲルボク イッソノ イクヨヘク

トミエニ カねに 一ニイ 一ニタシ ヤトホ をたぐ 一リテ につね 一レ

ハバ ナカ ナ 一ニセ アにカ クル 一カテ ホエリ シハモ ジハル キー

タリライ コハナ チ ノカケニ 一チチ ノカケニ 一

おもしろき調べなり 樂しき夏の夜や  
おもしろの夏は來ぬ 樂しめ夏の夜。

○淋しき谷間の白百合

大 荒 球 溪

一、人里離れし谷間の白百合

うき世の汚れは露だにそませず

ほゝろみ立てるは 優しき乙女か

清けき香や 妙なる姿や

我等も持たまし 崇高き汝が精神

あゝ

二、人足絶えたる谷間の白百合

よそほひかざらす此の世を恨みす

俯き立てるは友なき乙女か

清けき香や 妙なる姿や

我れしも訪はまし 淋しき汝が心情

あゝ

○ローレライ

一、今にもこのける奇しき傳説

心に抱きて訪ね來れば

ラインの流れは遠く延きて

入口に山の端あかく映ゆる。

二、そばだつ巖に夕日さして

光るは乙女の髪はげの装星はしほしか

碎くる白浪船を打ちて

心も雲くもけく眼まなこ眩くらむ。

三、忽ちうづまく深きよども

底そこひも知られぬ水の中みづか

妙にももれくる歌の調べ

永久とこにひびけや奇しきローレライ

○菩提樹

大 荒 球 溪

一、泉のほとり枝を伸べて

茂る菩提樹幾代經たる

何を語るか彫りし文字は。

『來りて憩へ幸福の蔭に

幸福のかけに』

二、憂ひ悩みを胸に抱き

暗をたどりて訪ね來れば

風にそよぎて枝は語る。

『來りて憩へ幸福の蔭に

幸福のかけに』

三、希望を胸に歸る家路

遠く隔て、願みれば

なほも梢に聲は残る。

『來りて憩へ幸福の蔭に

幸福のかけに』

○故郷の山河

大 荒 球 溪

一、麗朗の日かげに花は咲けど

故郷思へば心わびし

父母兄弟つがはなきか

夢にも見ゆるよ故郷の小山

名残を惜しみて別れし春は

再び此身にめぐり來る

何れの時にか事成し遂げて

戀しき山河 馴れにし山河

我は訪はん。

二、み空の月かけ清くすめど

故郷思へば眼曇る

姉妹友がきつつがはなきか

夢にも浮ぶよ故郷の小川

我家を離れて幾年月を

さすらふ此身に秋は來る

何れの時にか學業を終へて

馴れにし山河 戀しき山河

我は訪はん。

○波路の彼方

大 荒 球 溪

一、黄金の色そめし

遙けき海原

静かに暮れそめて 夕日は沈むか

思へばなつかしや 波路の彼方の。

二、心はほこばすや

わが胸しら波 戀しきふるさとの 母ます磯邊に

思へばなつかしや 波路の彼方の。

○樂しき農夫

大 荒 球 溪

一、親子兄弟姉妹寄りて。

しなへる小稻こいねを刈りぞ急げる

見よや雀も小田こゝらに群れつつ

豊とよけき秋を喜びをさる

嬉うれし農夫 樂し農夫。

二、つゞく日和に笑顔を見せて

干したる小稻を扱あぎぞ急げる

聞けや百舌鳥ももこと森に群れつ、

豊とよけき秋をよろこびうたふ

嬉うれし農夫 樂し農夫。

○秋の古城

山 崎 宗 泉

一、松の梢を 訪ふ風に

昔を偲ぶ 荒城の 草むらがくれ 蟲すたく

チンチロリチリ チンチロリ。

二、露と消えにし壯夫の

み靈たまごに捧たげし百千草

優やさしき貞操まことの花陰かげに

チンチロリチリ チンチロリ。

○秋のかなしみ

一、野山は 時雨ときりて ましか 悲しく

秋野の 白露しらつゆ あはれ まされり

二、さびしき さびしき 小夜の 雁かりが音

思おもひは 消きぬべく 吾われは 思おもはゆ。

昭和三年四月十日印刷  
昭和三年四月十三日發行

定價金壹圓參拾錢

不許  
複製

編纂者

若狹萬次郎

發行兼  
印刷者

東京市小石川區八千代町四十二番地  
若狹萬次郎

東京市小石川區八千代町四十二番地

發行所

交響社出版部